九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

死に逝く子どもについての一考察 : 看護の視座の転換のために

瀬川, 和子

高田, 熱美

https://doi.org/10.15017/231

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 21, pp.1-8, 1994-03. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan
バージョン：
権利関係：

九州大学医療技術短期大学部紀要, 1994, 第21号, 1-10
Memoirs Kyushu U. Sch. Health Sci., 1994, Vol.21, 1-10

死に逝く子どもについての一考察
— 看護の視座の転換のために —

瀬 川 和 子、高 田 熱 美

A Study of Dying Children
— Transfer of the Nursing Viewpoint —

Kazuko Segawa, Atsumi Takada

Most nursing scientists are interested in adult's death and someone is studying it, so that we can find a lot of papers written about it.

But we can hardly read the papers researching into the child's death, because scientists are used to see the child as a being quite different from the adult.

Today, it is said that almost children are not thinking their dying, and if they worry about dying themslves, tell them it is not likely to happen for many years.

According to the historical research, the idea like that is something special, derived from the modern social structure, and so it is not universal.

We think, therefore, nurses should care for the children as a personality, or a person of maturity and independence.

はじめに

かつて『死を想え』という時代があった。7歳までのうちに50～60％が死に、平均寿命が20歳になるかならぬかの、ヨーロッパ中世では、人々の関心はつねに死に向けられていた。これは我が国の場合も同様であったと思われる。だが現代と中世では死に関する態度は異なっている。現代のそれは乳児の死亡率で0.5％を下り、平均寿命が80歳に及んでいる。従って、現代では死は日常的なものではない。とはいえ『死』についての関心は高い。現代の死への関心は健康への高い欲求と表裏をなしており、むしろ生存への欲求が必然的に死への不安を喚起しているために生じていると見るべきであろう。高齢化が進むにつれてさらに健康への欲求と死への不安が高まってくるであろう。

こうして、現代では死についての情報、研究著作が数多く現われる。ところが不思議ともいえることは、ほとんどが大人の死についての事柄である。看護学の領域においても、大人の死の事例研究があり、大人の死に対するカウンセリング、ホスピス等の現実的な方策を見ることができる。他方、子どもの死については容易にその実践を研究の中でとりあげられることがない。それは何故であるか。また死に逝く子どもに対する看護はいかなるものでなければならないか。この小論はこのような問いに答えようとしたものである。

1．子どもたちの死

ホイジンガは『中世の秋』でこう語ったことがある。「15世紀という時代におけるほど、人々の心に死の思想が重くのしかぶさり、強烈な印象を与え続けた時代はなかった。『死を想へ』の

叫びが、生のあらゆる局面にとぎれることなくひびきわたっていた。」[1] 特に死は大人たちよりも子どもたちにとってこそ身近なものであった。中世から近世に至っても、子どもたちは死の只中に生きており、その生命は明日をも知れぬものであった。明白な統計的資料に出会うことは難しいが、子どもの死については個々人の発言からその事実をくみとることができる。

モンテーニュ（1533～92）は述懐する。「私は幼年時代を通じてただの二度しか、それもごく軽くしか鞭を受けたことがなかったそうです。私は自分の子どもたちにも同じようなことをしてやるつもりでいましたが、みんな乳呑み児のうちに死んでしまいました。」[2]

モリエール（1622～73）の『病は気から』では幼児を家族の人数に入れていないことを暗示している。「ねえ兄さん、あなたは財産もおありだし、下のお嬢さんを勘定に入れなければ、子供は娘さんただ一人、その1人娘をいったいどういうわけで尼寺などへ入れようとなさるのです。」[3]

アリエスは『孕み女のおしゃべり』（17世紀）から引用して、6人目の子を生んでしまった母親を近所の女が慰めている様子を描いている。「あんたに苦労をかける年にならないうちに、半分がとこ、ひょっとしたら全部くたばっちまうさ」[4]

さらに下って18世紀、ルソーは『エミール』（1762）の中で「最初の幼年期はほとんど病気と危険ばかりの時期であり、生まれてくる子どもの半数は8歳までに死んでしまう」[5] と語った。

歴史家のエドワード・ギボンはその『自伝』（1793）において次のように述べているという。「新しく生まれた子どもがその親の死ぬ前に死ぬことは不自然に思われるかもしれない。しかし、それは正しくも起こりうることであった。」それで、「私の弟たちの命名式があるたびに、用心深い父は、エドワードという私の洗礼名をくりかえした。そうすれば、長男が亡くなったとしても、父から出た呼び名が家族の中に存続するであろうと見たわけである。」[6]

19世紀に入ってもこの事情に大きな変化はない。ナイチンゲールの『看護覚え書』（1868）は語る。「家庭の母親たちよ、……ロンドンでは5歳になるまでに5人に2人までが死亡しているし、また英国の他の大都市ではそれがほぼ2人に1人だということを知っているだろうか。」[7]

さらに我が国の事例をみると、新井白石（1657～1721）は3男6女を得たがそのうち5子を幼いときになくしている。11代将軍家斉には55人の子女がいたが、2歳までに21人を亡くしている。同じ頃、小林一茶は5人の子どもたちのうちやはり2歳までに4名を失っている。

日本人の人別帳に乳幼児の記載が少ないのは、乳幼児は死ぬことが多いので、はずされたのであろう。乳幼児は『7歳までは神のうち』であって、人のうちには入ってはいなかったのだ。このような見方は西洋でも同じであった。アリエスによれば「小さな子どもは死亡する可能性があるゆえに、数のうちに入っていなかった」[8] のである。

近世に至るまで子どもは多く生まれ多く死んでいった。1夫婦が生涯にもうける子どもは最低5～7人であったと推定される。そしてそのうち60％以上が2歳までに亡くなったという。子ども＝死ぬ者というのがその時代に生きる人びとの理解であった。

このような事実に立てば、人びとは子どもの生死を自然に委ねるほかはなかったであろう。また子どもが生育して若者になったとしても彼らを労働力として用いるような産業構造も育ってはいなかったのである。それゆえ人びとにはここでは子どもの世話・看護などはほとんど徒労に思われたにちがいない。

2．死から生へ — 小児看護の芽生え —

近世に至るまで死はいたるところで見られた。死は日常的なものであった。餓死、凍死、病死、戦死、刑死を子どもたちは見て育った。フーコーが指摘していたように処刑は衆人環視の下で行われた。[9] そして子どもさえ処刑されたのである。ランゲフェルドはテオドール・アグリッパなる幼い天才の処刑についてこう記している。

「モンテーニュよりも少し若い同時代人である

テオドール・アグリッパは、1550年に生まれ、6歳にして4ケ国語を読みこなし、7歳でプラトンの翻訳をなしとげたのであった。……しかしテオドールが8歳の時、事件が起こった。彼の父親は彼をアムボワースの町へ連れていき、数名のプロテスタントの首切りの現場を目撃させた。そして父親はこれらの犠牲のために復讐することを息子に誓わせたのである。2年後、彼は宗教裁判所の役人の前に引き立てられたが、火刑用の柱を前にしてこの10歳の少年は一切の妥協を拒否したのであった。まことにこれは1人の子供の生涯の驚くべき構成ではないか……彼は4歳でラテン語、ギリシャ語で授業をうけ、6歳でプラトンを読みこなし、7歳の時プラトンの著作の一つを翻訳し、8歳で首切りのありさまを見て誓いをたて、10歳になった時、当時の宗教裁判官は火刑による死罪をもって彼を処罰することが正当であると判断したのである！」[10]

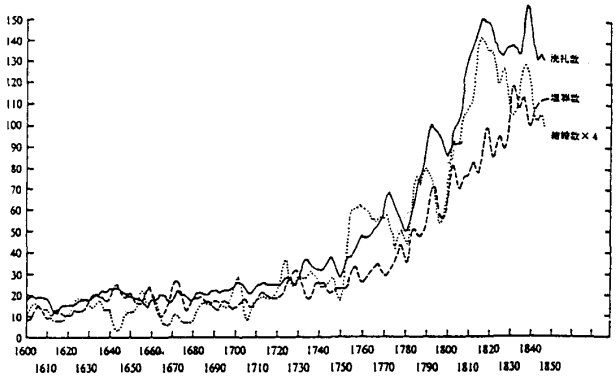
子どもに死罪を与える裁判官はそのような社会にあったのであって、その社会は、7歳を越えたものを子どもとは見なさなかったのである。他方7歳に満たぬ者はいずれ死に逝く者であり、人間の枠外にある者であったのである。これらの子どもに死を隠すことなど思いもよらぬことであったといえる。

ところが近代になると、このような見かたに変化が起こりはじめる。これは人口の増加および産業構造の変化と関連している。若干の統計的資料によれば18世紀半ばまでくらいはヨーロッパの人口動態に大きな変化はなかったであろう。この時期の出産は最低5～6人であったといえる。ただし、7歳までの死亡率が50～60％であるとすれば5～6人の子どもからやっと2人かそこらが生き残るのであり、これによって人口の動態がおよそ安定可能な域に達するからである。したがってルソーが述べていたことであるが、地方によっては「4～5人しか子供を生まない女は多産とは見なされない」[11] というのも諾うことができる。

18世紀半ばから人口が増加する。人口増加の原因は何か。イギリスを標準において見ると、アシュトンは「人口の増加を導いたものは死亡率の下降であった」[12] という。そして死亡率の低下を促したものは衣食住の継続的改良であったとする。だがこれだけの原因ではあるまい。『ガリバー旅行記』を著したアイルランドのスウィフト（1667～1745）は『貧家の子女がその両親並びに祖国にとって重荷になることを防止し、かつ社会に対して有用ならしめんとする方法についての私案』[13]（1729）という論文の中で「よく育った健全な赤ん坊は丸1歳になると大変美味しい滋養のある食物になる」として、この国の不要な貧民の子ども10万を食用に供することを提案した。もちろんこれは風刺であるが、このことは子どもの出生数が次第に増加していることを示しているといえよう。つまり人口の増加は出生数の増加によるといえるのである。たとえば7歳までの死亡率が60％であるとしても8人の子どもを産めば少なくとも3名は生き残ることになろう。

リーヴァインはイギリス、レスターシャーのシェプシェド村の人口動態を明らかにし、人口増加が出生数の増加によることを明らかにしている。[14]（図1）

図1　シェプシェド村における結婚数・洗礼数・埋葬数の長期波動



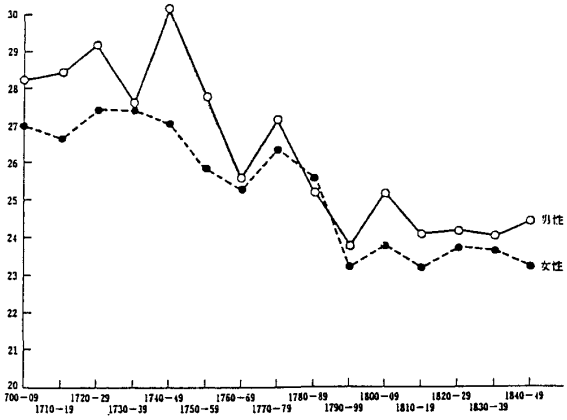
Levine, D. Family Formation in an Age of Nascent Capitalism, London, 1977, p.59.

さらにリーヴァインは出生数の増加は、若者とくに女性の初婚年齢が低下していることにあるという。（図2）

初婚年齢がなぜ低下したのか。シェプシェ村の産業構造が変化してきたからである。この村

に家内工業が芽生え、やがて産業革命へと巣立つことになる。いわば産業技術の発達は村の生活を向上させ結婚を早めることになるのだ。そして出生数の増加はそのまま将来の労働力として期待されるのである。それゆえ子どもは特別の存在として大事に扱われるようになる。イギリスでは小児医学者トマス・フェアーの『子どもの本』(1543) やJ. ジョーンズの『出産指導書』(1579) を見ることができるが、この時期・18世紀半ばに社会的には初めて子どもは保護・世話いわばナースの対象になったといえよう。

図2　シェプシェド村における初婚年齢の変化



Levine, D. *Family Formation in an Age of Nascent Capitalism*, 1977

とはいえ、この時点では子どもの死亡率は大きくは下降していない。死亡率の低下は19世紀半ばを待たねばならない。(表1) (図3)

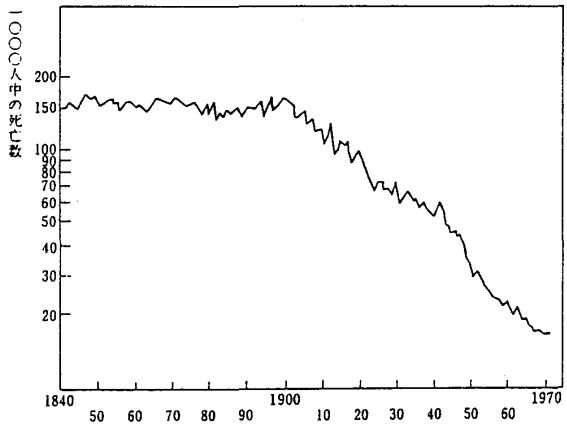
表1　ロンドンにおける乳幼児死亡率

時　期	乳幼児死亡率
1730〜1749	74.5
1750〜1769	63.0
1770〜1789	51.5
1790〜1809	41.3
1810〜1829	31.8

The Lancet, 1836,(i) p.960.

乳幼児の死亡率の低下は小児医学や産科学の普及と発達があげられるであろう。それに育児の方法が改善されたことと、衣食住の充実もある。とりわけ子ども用の衣服や加工ミルクの普及は死亡率を低下させることに役立ったといえる。

図3　イギリスにおける乳幼児死亡率の変化



Beaver, M. W. Population, Infant Mortality and Milk, *Population Studies*, Vol.27, No.2, 1973

しかしすでに垣間見たように乳幼児の死亡率を低下させた最大の要因は子どもは大事に育て、生かさねばならないという親たちの感情である。この感情は社会の産業構造一分業化に応答する意志であったのだが、この感情はルソーを始祖とする近代の新しい子ども観によって独自のものとして開花する。

「子どもの発見」である。周知のようにルソーが語る「子ども」は自然なもの即ち純粋無垢にして善なるものであった。子どもは大人と違った特別な存在と見なされるのである。親たちの関心も子どもへ向けられ、子どものために生きるかのごとき感情に満たされる。このことは二重の意味で子どもを死から遠ざけることになる。ひとつは子どもの死を恐れ、子どもの生活を配慮して、死亡を遠ざけることであり、もうひとつは死ということを子どもから隠すということである。

死というものは美しくけがれのない子どもにとっては恐ろしく有害なものであって、性と同様に子どもにふれさせてはならないと思われるのである。人びとは子どもの生のみへ関心を抱き、その生活に注目するようになったのである。小児看護はこのような社会および価値的変動の中で芽生えたのであった。

もっとも我が国では西欧のロマン主義的子ども観が導入される前に、古代より、子どもをいつくしむ風があった。「銀も金も玉も何せむに

勝れる宝　子に如かめやも」、「瓜食めば子ども思ほゆ　栗食めば　ましてしのばゆ　何処より来りしものぞ眼交に　もとな懸りて　安寝しなさぬ」(山上憶良)、「をかしげなるちごの　あからさまに抱きて遊ばし　うつくしむほどに　かいつきて　寝たるいとらうたし」(清少納言)、「遊びをせんとや生まれむ　戯れせんとや生まれけん　遊ぶ子どもの声きけば　わが身さへこそゆるがるれ」(梁塵秘抄)、あるいは「わんぱくや　縛られながらよぶ蛍」(小林一茶)、「かすみたつ　ながき春日を子供らと　手まりつきつつ今日もくらしつ」(良寛) などはその証左であるといえよう。この日本の風土で発芽した子ども観は、西欧で生まれた新しい子ども観を受容し、さらに強固なものへと成長したのである。かくして子どもから死は追放される。

3．死の理解 — 子ども自身による —

子どもの死を恐れた親のみならず、看護者たちも、死については子どもの問いかけなどに対しては無関心や冷静さを装う。子どもは無垢であり、しかも、もろく傷つき易いものである。同時に子どもは死のことなど解りはしないのだとの思いが、死についての話題を追放させる。死に逝く子どもを不びんに思いながらも残された両親の苦悩の方へ看護者は共感する。共感しようにも子どもに苦悩の感情がなければ子どもへの共感は成立するはずもないと見るのである。かくして、死に至る子どもについての研究は極めて少ない。もちろん、カウンセリングやホスピス、死ぬ子どもへの心理的援助といったものは試みられない。しかし、はたして子どもは自己の死について考え、理解することがないのであろうか。

死についての子どもの理解には若干の研究を見ることができる。L. ペラー、A. M. A. ウルフ、R. A. ファーマン、M. H. ナギー、G. P. クッチャー、A. フロイト、E. K. キュブラ・ロス、S. ユドキン、らの研究がそうである。[14] これらはそれぞれ発達心理学、小児精神分析学、哲学などの分野から書かれており、その内容も多岐にわたっている。けれども子どもが成人と同様な死の理解に近づくのは、およそ10歳頃からであるというのが共通の見解となっている。

子どもが成人と同様な死の理解に近づくとは、死それ自体を知るということではない。それは不可能なことであろう。死は知ることも、体験することもできないのだから。それゆえ、死の理解とは、死を不可避かつ不可逆、普遍的な出来事と見ることである。現在の文化圏において、死とは永久的な出来事なのである。

このような理解はわが国でも10歳（小学4年生）頃から始まるといわれている。この時期に子どもは自己に目覚めるからである。自己に目覚めるとは自分自身の世界を持つということである。たとえば、この時分には子どもは十分に嘘をつくことができる年令に達している。嘘とは他人に対して、自己の世界をかくすことができるということであり、外言に対して内言が発見されたことである。内言とは自己の世界を創造し、自己の空間時間的地位を築くことである。それゆえ子どもは自己の空間時間的視点いわば判断の核を成立させる。子どもは自己の立脚点から自己を空間的に位置づけ、現時点から過去、未来へと遠望するのである。このため、子どもは自己の物語（歴史）を語ることができるし、自己の将来を想うことができる。そしてこの物語はやがて死をもって終ることを子どもは知る。つまり、いまだ語られてはいないが、想像ないし仮定によって現在へ進入してくる未来を見て、やがては自己が死ぬことを理解するのである。したがって、死の理解は、死の不安や死の恐れとなる。子どもは病床でこう考えることがある。「自分が死ぬとどうなるか。自分がいなくなることだ。いないということは自分がいないということもわからなくなる。その自分がいなくなるということはどういうことか。」こういうとき、子どもはズーンと深い淵へ落ちて行くような気がして、ゾッと身振いするのである。かくして、死の理解とは、自己の理解と関わっていることがわかる。自己に目覚める子どもが死を理解し、死の哀しみと恐ろしさに気づくのである。であ

れば、死の看護は成人だけではなく子どもにも及ぼされねばならないことになろう。

4．死にかかわる看護

人においては、自己洞察ができるようになったとき自己の死が理解の射程に入る。

死を理解することは自己を理解すること、死を忘れるなとは自己を忘れるなということである。死を想うことと自己を知ることとは対なのである。看護はこのような子どもに対していかなる態度をとるべきであるか。

いうまでもなく、死ぬ者への看護は安らかさへの看護である。安らかに死ぬことへの配慮が看護の焦点となる。それは、子どもの問いかけへ知りうるかぎり答え、対話を創造することであろう。それゆえ、あのソクラテスの『パイドン』がここでも原点となるであろう。ソクラテスは迫りくる死を前に死についての対話を行い、探究を続けたのであった。同様に、子どもを特別扱いせず、1人前の人間として、その人格の問かけに看護者は応答すべきである。「死んだら私どうなるの」といった問に対して「そんなこと聞くものではありません」「もっと他のことを考えましょうね」「静かに休みなさい」「そんなことを聞くのはよい子ではありません」などと答えてはならないのである。気休めの言語や回避、抑圧的言動は安らかな死へと誘いはしないのである。

看護者は、まず子どもの死の不安や恐れを聞くこと、子どもに自由に語らせること、これだけで子どもは死にまつわる諸感情を軽くすることができるのである。これが対話への歩みである。そして、対話によって死を問うことは自己を問うことである。子どもは死ぬまで自己を問い、完成へと向かう権利を有しているのである。このことは10歳に満たぬ子どもについてもいえる。死の近い子どもは子どもでありながら、すでに1個の生を全うしようとする成熟した人間と見ることができる。

幼い子どもにおいては、「私、天国に行ったら、おばあちゃんやポチ（犬）に会えるのよね」という語りかけに対して、「そうかも知れないね、きっと」と応じてよいであろう。

子どもがサンタクロースがいると思い、そう信じていたいという欲求を抱いているとき、大人たちがその欲求を認めることは重要である。これは子どもを特別な存在と見なして子どもを特別扱いすることと同義ではない。少なくとも科学的合理性のもとに、「そんなことないよ」と否定することは誤りであろう。これは子どもの欲求ひいては人格を無視することなのだ。他の人を侵害しないならば、人は誰でも信じていたいことを信じることを許されるべきである。とくに死については。けだし、それは、何人であれ死および死後の世界について知ってはいないからである。この態度は、死について考え、問いかける子どもに対しても同様である。

こうして、死についていうかぎり、子どもを特別な存在と意識して、特別な扱いをすることは正しくない。子どもを特別なものと見ることと子どもの人格を尊重することは同一ではない。子どももまた、死において、短いとはいいながら、その人生を完遂する1個の完成した人間なのである。ここでは子どもも大人である者として遇される。こう見るならば、ロマン主義的子ども観をまとった子どもの見方は変更しなければならない。かくして、看護は、子どももまた安らかな死へ至る途を成人と同様な仕方で開かれるべきであることを知るのである。

5．看護の課題

自己の意識が芽萌えていない10歳前の子どもは死の不安や恐怖にさいなまされることは少ない。それゆえ成人のようにうつ的症状を示すことなどもない。けれども、子どもが自分の死に気づいていないわけではない。子どもたちは、寛解、退院、入院をくりかえすうちに、自分の病気が治らないこと、このまま病院に居て、死ぬことを気づくようになる。大人たちの言動や同じ部屋にいた子どもがいなくなったこと、などから自分も同じ道をたどることを知る。

ブルーボンド・ランガーは、3歳から9歳まで

の、白血病で死んでゆく子どもを精力的に研究した唯一の女性であるが、彼女によれば、末期の子どもたちには、その言動には9つの特徴が現われるという。[16]

1．亡くなった子どもたちの名前や持物をさける。
2．病気と関連のない話しや遊びに興味をなくす。
3．遊びや絵本はお墓、十字架、主人公の死など、死に関するもので占められる。
4．特定の人とだけ本当の話をする。
5．家に帰ることを心配し、いやがる。「私ここにいたいの」「ここの方がらくだわ」と言ったりする。
6．未来のことについて話さなくなる。お祭、クリスマス、新学期、誕生日など、「お兄ちゃんの誕生日には、もうここにはいないのよ」と言ったりする。
7．せっかちになる。「時間を無駄にしないで」「行ってよ、時間のむだだよ」など。
8．あまり痛くない処置でも抵抗する。
9．怒りや沈黙を通して家族や友人から身を引くようになる。

アメリカの文化・家族・病院・社会の中で生育している子どもの特徴がそのままわが国の子どもに現われると即断はできないであろう。ランガーが指摘していたことであったが、子どももまた生きているかぎり、社会の一員として育てられ、社会の一員になろうと試みているのであるから、自分の死についての気づきや表現も、社会との関わり合いを通してなされるのである。

子どもの言動に文化の差異があるとすれば、わが国の子どもの場合には違った行動が見られるかもしれない。とはいえ、文化は差異よりも共通の部分が多いのであって、大方の子どもは、自分が死ぬことに気づいており、気づいていながら社会の人になろうとして生きているというべきであろう。従って、わが国の子どもの場合にも、死については、「子どもたちが知りたいことだけ、質問していることだけを、子ども自身のことばで話してあげればいいのである[17]。」そして、できるかぎり、親や家族の者が子どものそばにいてくれることが大切である。かく見ると、とくに末期の子どもに関しては看護者と子ども自身のみならず、子どもと親たちとの適切な応答関係をつくりあげることが、看護の課題となってくるであろう。

結び

筆者は、病床にふせって、死を待っている子どもたちから、自分たちの死について問われたり、死についての考えを聞かれたりしたことはない。筆者の数十年の看護経験を通して見ると、子どもたちのなかには、死の間際まで活動的な者もいた。また、ほとんどが死ということについては驚くほど寡黙であった。子どもたちが看護者に尋ねることは日常の行為や身の回りのことのほか、様々の症状についてであった。検査の時などには、「白血球は増えていますか？」「血小板はどうなっていますか？」等々を子どもたちは尋ねた。

とはいえ、子どもたちが自分の死を考えていないということではない。自分の生命を疑い、じっと考えることがあってもそれを言葉に表わさないだけと思われる子どもも数多くいた。また思春期に至ってから、自分の死に気づいた者や他の人から偶然、死を知らされた者の中には、自暴自棄的反応を示す者もいた。老齢者と違って、自我に目覚めたばかりの者は、とくに自分の生に対する執着が強くなるので、それは当然のことと思われた。この場合、日頃、死について思い、自然に語り、考えることができるようなケアが必要であったと思われた。

子どもは、その発達年齢によって、死についても多様な反応と理解を示すが、いづれも死にゆく者は、たとえ5歳であろうと、すでに人生の終局（finis）即ち目的（finis）へ向かって、成熟しつつある者とみなされる。看護者が子どもをこのような者として見るとき、子どもは心を開き、自分の死について考えていること、疑っていることなど語ることが可能となる。少なく

とも、そういう時が看護者のケアの中で創造されねばなるまい。つまり子どもが、短いながらも生きるに価いする人生を送ることができるとすれば、それは、子どもを幼稚な、感情の乏しい、理解力も考える力もない者としてではなく、またたんに可愛いい無垢な者としてでもなく、あくまで、自分の人生を生きる独立した人格として見ることであって、そのような観点から、ケアを進めることが看護者にとっては望ましいのである。

引用・参考文献

1）ホイジンガ、『中世の秋』、中央公論社、1967, p.268 − 269.

2）モンテーニュ、『エセー』、松浪信三郎訳、世界の大思想4、河出書房、昭和41、p.322.

3）モリエール、世界文学全集Ⅲ − 6、鈴木力衛訳、河出書房新社、昭和40、p.347.

4） Aries, P. Centuries of Childhood, Jonathan Cape, 1962, p.38.

5）ルソー、『エミール』、平岡昇訳、河出書房新社、1966、p.19.

6） Ashton. T. S, The Industrial Revolution 1760 − 1830. Oxford University Press, Maruzen Company, 1960, p.5.

7）ナイチンゲール、F.『看護覚え書』、湯槙ます他訳、現代社、1968、p.12.

8）アリエス、『〈子供〉の誕生』、杉山光信・恵美子訳、みすず書房、1980、p.123.

9）フーコー、M.『監獄の誕生』田村俶記、新潮社、1977.

10）ランゲフェルド、『教育の理論と現実』、和田修二監訳、未来社刊、1972、p.184〜185.

11）ルソー『エミール』、前掲訳書、p.409.

12） Ashton, the Industrial Revolution. p.5.

13）深町弘三訳、『恐ろしい話』、筑摩書房、1988、p.395.

14）図表はいずれも北本正章氏引用のもの『世界子どもの歴史』6（第一法規、1985）による。

15）(1) Furman, R. A. : Death and the young child, Psychoana, Study of the child, 19, 1964.

(2) ゲゼル、A.（周郷博他訳）：学童の心理—5歳より10歳まで、家政教育社、1967.

(3) ナギー、M, H.（大原健士郎訳）：死に関する子どもの見方、死の意味するもの、岩崎学術出3、岩崎学術出社、1973、p. 80 − 101.

(4) Koocher, P. T.:Talking with Children about Death, Amer. J. Orthopsychiatry, 44, Apr, 404 − 411、1974.

(5) キューブラー・ロス・E,『死ぬ瞬間の子供たち』川田正吉郎、読売新聞社、1982.

(6) ユドキン, S. 子どもと死,『死について』筑摩書房、1972.

16） M. ブルーボンド・ランガー『死にゆく子どもの世界』、日本看護協会出版、1992、p.178.

17）同上、p.177.